

「特別の教科 道徳」の実践

平 田 繁

Special Subject Execution on Morality

Shigeru Hirata

(2016年11月25日受理)

はじめに

小学校の道徳教育は、2018年4月より、道徳科として施行される。2015年4月からは移行期間として、教育課程の編成及び指導については改正後の小学校学習指導要領の各規定によることができるとして^[1]、現在先行実施をしている小学校もあるだろう。しかし、指導法や教材、評価について具体的な提示がない中、教育課程の編成等を進めることは難しい。

そのような中「『特別の教科 道徳』の指導方法・評価等について(報告)」^[2]が公表された。この報告は、道徳教育の現状や道徳教育と道徳科の関係、質の高い多様な指導法、評価の在り方からなっている。新聞各社^[3]は、7月23日の朝刊に「『道徳科』評価 記述式で 入試合否使わず」に見られるように評価が記述式になったことや入試には使用しないこと等、世論が注目する部分を見出しで取り上げている。しかし、指導と評価は一体化しており、この報告の中に移行期間の実践、及び完全実施に向けての具体的な準備があると考えられる。そこで本報告を読み解きながら、道徳科の実践、指導方法と評価について言及するものである。

1. 道徳教育の現状と課題

道徳が教育課程上に位置付けられて約60年。この間、文部科学省や県教育委員会等の研究指定校や自主的研究・発表、サークルでの成果では、以下のことを挙げている。

- 指導過程は、「導入・展開・終末」の3段階で構成。各段階における教師の発問や指導の在り方を示すことによって、一定水準の道徳の授業を行うことがで

きた。

- 展開後段では、資料中で扱った事柄ではなく、より幅広い視点から自分自身を振り返ることが大切。
- 展開後段や終末で、単に一律に決意表明的なことを発表させるのは望ましくない。
- 単に生活上の個別の課題の解決を考える学習は道徳の時間とは言えない。
- 道徳の時間に児童生徒の実態を踏まえず安易に理由を聞く発問はふさわしくない。
- 道徳の時間に体験的な学習を取り入れることは難しい。
- ねらいは、一つの授業で一つであることが望ましい。
- 深く考えるには主人公の心情が描かれた読み物資料がふさわしい。

しかし、このような成果に対して大きな課題を挙げている。

道徳教育は、学校の教育活動全体で行うものであるが、不十分であったり、偏っていたり、バラバラだったりする。そこで道徳科を「要」として、「補う、深める、捉え直したり発展させたり」することが期待される。しかし、「歴史的経緯に影響され、いまだに道徳教育そのものを忌避しがちな風潮があること、他教科に比べて軽んじられていること、主題やねらいの設定が不十分な単なる生活経験の話合いや読み物の登場人物の心情の読み取りのみに偏った形式的な指導が行われる例がある」としている。

指導方法も「『指導過程の型』の『形式化、固定化を招いたり、実際の指導場面でそれらに固執したりするようであっては、かえって指導の効果を低下させることになるであろう』と指摘しているにもかかわらず、主題やねらいの設定が不十分なまま、これらの指導過程に過度に

別刷請求先：平田 繁，中村学園大学教育学部，〒814-0198，福岡市城南区別府5-7-1

E-mail：hirata@nakamura-u.ac.jp

[1] 文部科学省「学校教育法施行規則の一部を改正する省令の制定，小学校学習指導要領の一部を改正する告示の公示並びに移行措置等について(通知)」2015年3月27日

[2] 道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について(報告) 2016年7月22日

[3] 朝日新聞「道徳 評価は記述式 発言・感想文で成長把握 教員『枠にはめる』懸念も」2016年7月23日付朝刊，産経新聞「『道徳』評価は記述式 他の子供と比較せず 入試活用は否定」2016年7月23日付朝刊，日本経済新聞「『道徳』評価 記述式で 入試に使わず」2016年7月23日付朝刊，読売新聞「『道徳科』評価 記述式で 入試合否使わず」2016年7月23日付朝刊

固執したり、これを『型』どおりに実践していればよいと捉えたりする姿勢も一部には見られ、指導が固定化・形骸化しているのではないかと、読み物の登場人物の心情の読み取りのみに偏っているのではないかと、望ましいと思われることを言わせたり書かせたりする指導に終始しているのではないかといった指摘につながっている」としている。

このような道徳科に関わる量的・質的課題は、日常生活で即効性を期待するあまり、道徳性を間違えて捉えて指導しているからである。また、正確に捉えていたとしても時間的なゆとりの無さや学力重視の風潮の中で、児童の実態や発達段階を考慮してじっくりと主題や展開を考えて学習を組み立てることが難しいからである。そうになると年間指導計画の展開の概要や副読本の教師用指導書に書かれている指導展開例に沿いながら発問をして「授業を流す」ことになり、ねらいや思いが不十分で子ども達は中途半端な時間を過ごすことになる。結局、道徳性の育成には時間が掛かることから、指導をしてもしなくても大きな影響は無いと教師自身が正当化してしまう恐れもある。指導者の姿勢から子どもの道徳性の成長の把握や今後の指導の方針、不十分だった指導の改善は評価されることなく、次週の時間へと続くことになる。このことを年間35週繰り返していけば、育つものも育たず、無意味な時間となり、結果として教科指導や生活指導に充てた方がましだとなる。子どもの道徳科に対する姿勢も後ろ向きとなり、悪循環となる。

しかし、これからの世の中の動きを考えた場合にこれで良いのだろうか。2020年の東京オリンピック・パラリンピックを機に、グローバル化は一層進展する。異なる言語や文化、価値観の中にあっても、互いに交流し、自国の利益のみならず他国の利益や発展を尊重する姿勢が一段と求められるようになる。また、今後AI(人工知能)の開発や進展も見逃すことができない。利用や活用が様々な分野に広がり、便利で豊かな生活に激変する。その中で人間の存在や役割、意義が問われるようなことも出てくる。環境問題や2025年団塊世代の高齢化問題等々。今後の世の中の変化は急速で予測不可能な状態である。このようなことから「論点整理」^[4]における「何を理解しているか、何ができるか(知識・技能)」、「理解していること・できることをどう使うか(思考力・判断力・表現力等)」、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(学びに向かう力、人間性等)」といった三つの柱の資質・能力は道徳教育の目標と重なっており、具体化する折には絡ませることが重要である。また、「特定の価値観を押し付けたり、主体性をもたず言われるままに

行動するよう指導したりすることは、道徳教育が目指す方向の対極にあるものと言わなければならない。むしろ、多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、誠実にそれらの価値に向き合い、道徳としての問題を考え続ける姿勢こそ道徳教育で養うべき基本的資質」や「自らの人生や社会における答えが定まっていない問いを受け止め、多様な他者と議論を重ねて探究し、『納得解』(自分が納得でき周囲の納得も得られる解)を得るための資質・能力」が期待されており、「道徳教育の質的転換」は急務である。

2. 質の高い指導方法

道徳教育の要が道徳科である。道徳科の目標「内面的資質としての道徳性」を主体的に養っていくため、児童一人一人が、ねらいに含まれる道徳的価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習が期待されている。そこで、「登場人物の心情理解のみの指導」や「主題やねらいの設定が不十分な単なる生活経験の話し合い」にならず、固定化・形骸化した指導方法から脱却するため3つの事例が示されている。

(1) 読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習

この学習指導法は、「教材の登場人物の判断や心情を自分との関わりにおいて多面的・多角的に考えることを通し、道徳的諸価値の理解を深めることについて効果的な指導方法であり、登場人物に自分を投影して、その判断や心情を考えることにより、道徳的価値の理解を深めることができる」とある。具体的な展開例は表1の通りである。

導入では、本時学習する指導内容(道徳的価値)に関わる体験や話から興味関心、意義、道徳的価値のズレ等から方向付けを行う。展開前段では、教材を読んで登場人物の行為(良い、悪い)の動機を探る。その時に自分に置き換えたり、重ねたりしながら自身の経験から理由を考える。展開後段では、本時のねらいとする道徳的価値に照らして自分自身の十分さや不十分さを見つめさせたり、他者と交流させたりすることにより深める。終末では、本時学習のまとめとするために、自分なりの考えを整理したり展望を書いたりする。本展開は、表2にある学習指導要領解説道徳科編の一般的な学習指導過程と基本的に合致している。特徴的な部分は、登場人物の判断や心情を類推することを通して、道徳的価値を自分との関わりで理解することである。

次に具体的な例を挙げて考えることとする。

[4] 文部科学省「教育課程企画特別部会における論点整理について(報告)」2016年8月26日

「わたしたちの道徳小学校三・四年」に「同じ仲間だから」^[5]という資料がある。指導内容は「(9) 友達と互いに理解し、信頼し、助け合うこと」である。仲間外しに同調しようとしたが、思い留まり、友達を大切にしたい主人公の話である。この資料で展開前段の発問を考えてみると「どうして主人公は、三人で頑張ろうという判断をしたのだろう」、「自分だったら主人公のように行動することができるだろうか」と、そのまま当てはめることが出来る。展開後段の「振り返り」では、「同じ仲間」や「友達」ということから、今後の生活の中で大切にしたいこととしながら、「(9) 友情、信頼」の価値理解へと導くことが出来る。しかし、留意することとして次のことが考えられる。行為の動機を探る時に、読み取りになることである。正しい行為の選択ができたのは「友達の手紙を読んで、心が変化したから」となる。また、道徳的価値の追求が不十分となると振り返りで「道徳的価値のキーワード」を確認するだけの「押し付け」になる。

表1 読み物教材の登場人物への
自我関与が中心の学習

ねらい	教材の登場人物の判断や心情を自分との関わりで多面的・多角的に考えることなどを通して、道徳的諸価値の理解を深める。
導入	道徳的価値に関する内容の提示 教師の話や発問を通して、本時に扱う道徳的価値へ方向付ける。
展開	登場人物への自我関与 教材を読んで、登場人物の判断や心情を類推することを通して、道徳的価値を自分との関わりで考える。 【教師の主な発問例】 ・どうして主人公は、○○という行動を取ることができたのだろう（又はできなかったのだろう）。 ・主人公はどういう思いをもって△△という判断をしたのだろう。 ・自分だったら主人公のように考え、行動することができるだろうか。 振り返り 本時の授業を振り返り、道徳的価値を自分との関係で捉えたり、それらを交流して自分の考えを深めたりする。
終末	まとめ ・教師による説話。 ・本時を振り返り、本時で学習したことを今度どのように生かすことができるかを考える。 ・道徳的諸価値に関する根本的な問いに対し、自分なりの考えをまとめる。 ・感想を聞き合ったり、ワークシートへ記入したりして、学習で気付いたこと、学んだことを振り返る。

道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議資料引用

このような旧態依然の指導に陥らないためには、中学年という発達段階の確認、友達関係についての捉え方、「同じ仲間」「友達」等、指導内容の価値についての指導者の考えや思いが重要となってくる。また、「○○の時の気持ち」を頻繁に問うことは無くなり中心場面に焦点を絞って、望ましい行為の背景を探るために、指導者自身が資料の背景や状況把握を十分した上で、児童に確実に状況をおさえて話し合いを仕組むことである。さらに、読み取りとしないために状況を押さえての発問や補助発問の工夫が必要となる。そして、日頃の学級経営と絡めながら、学級や子ども一人一人の実態に基づき、より良い学級作りを目指す子どもや担任の姿勢が根底になければならない。

本学習指導法は、今まで同様、資料を中心とした方法である。文部科学省等の読み物資料は、「起承転結」型の読み物資料が多く、より良い行為や生き方を表しているため、この展開が多くなるであろう。しかし、背景を探る時に日常的に子ども達が経験するような話であれば問題ないが、時代背景やスポーツ等のルール、登場人物の年譜、科学技術等の知識が必要となる場合がある。道徳

表2 解説の一般的な学習指導過程

導入	導入は、主題に対する児童の興味や関心を高め、ねらいの根底にある道徳的価値の理解を基に自己を見つめる動機付けを図る段階であると言われる。 具体的には、本時の主題に関わる問題意識をもたせる導入、教材の内容に興味や関心をもたせる導入などが考えられる。
展開	展開は、ねらいを達成するための中心となる段階であり、中心的な教材によって、児童一人一人が、ねらいの根底にある道徳的価値の理解を基に自己を見つめる段階であると言われる。 具体的には、児童の実態と教材の特質を押さえた発問などをしながら進めていく。そこでは、教材に描かれている道徳的価値に対する児童一人一人の考え方や感じ方を生かしたり、物事を多面的・多角的に考えたり、児童が自分との関わりで道徳的価値を理解したり、自己を見つめるなどの学習が深まるように留意する。児童がどのような問題意識をもち、どのようなことを中心にして自分との関わりで考えを深めていくのかについて主題が明瞭となった学習を心掛ける。
終末	終末は、ねらいの根底にある道徳的価値に対する思いや考えをまとめたり、道徳的価値を実現することのよさや難しさなどを確認したりして、今後の発展につなぐ段階であると言われる。 この段階では、学習を通して考えたことや新たに分かったことを確かめたり、学んだことを更に深く心にとめたり、これからへの思いや課題について考えたりする学習活動などが考えられる。

[5] 文部科学省「同じ仲間だから」『私たちの道徳小学校三・四年』76-79. 運動会でする「台風の目」のクラス対抗競技でとも子、ひろし、光夫がグループを組むことになった。しかし、光夫は運動が特に苦手。光夫が指を怪我していることをいいことに、ひろしは体育を休むように言う。同調を求められたとも子は困ったが、遠くに転校した友達からの「仲間外し」の手紙を思い出し、ひろしを外すことに反対し、一緒に競技をするという話である。

的価値の理解が上辺だけの「キーワード」ではなく、深いものであるためには資料の事前読みと感想を書かせることを奨励し、その中から疑問や背景を調べる、把握する、理解する等の準備を促すべきである。また、指導者が粗筋を端的にまとめた状況把握図や資料の背景に関わる情報の提供の準備等をすべきである。さらに1単位時間でなく、2単位時間を充てる、他教科等との関連、事前の活動を仕組む等も考えるべきである。

(2) 問題解決的な学習

この学習指導法は、「児童生徒一人一人が生きていく上で出会う様々な道徳的諸価値に関わる問題や課題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養うことができる。問題場面について児童生徒自身の考えの根拠を問う発問や、問題場面を実際の自分に当てはめて考えてみることを促す発問、問題場面における道徳的価値の意味を考えさせる発問などによって、道徳的価値を実現するための資質・能力を養うことができる」とある。

展開例は表3の通りである。導入では、資料や時事的なことから興味関心を高め、道徳的な問題場面や道徳的価値の本当の意味等の、課題を把握させる。展開前段では、道徳的な問題や明らかにする道徳的価値の意義等の解決に向けて話し合う。「何が問題か?」「どうすればよいのか?」や「〇〇は大切なのになぜか?」となり、「なぜ?」や「どうして?」、「自分ならどのように行動するか」の話し合いとなる。その際の問題は、価値理解（道徳的な価値は大切だ）、人間理解（人間は弱く、実現することは難しい）、他者理解（色々な考え方・思いが存在する）のいずれかが、または重なり合って問題を成していると考えられ、話し合いの視点となる。展開後段では、解決策の選択や決定となる。その際には、理由付けが大切で、道徳的価値の意義や意味の理解を深めることとなる。終末では、道徳的な問題に対する自分なりの振り返りと新たな気付きを書き留める。ところで問題解決的な学習は、学級活動の話し合いと同じような展開となり、議題や題材、つまり話し合う必要性を感じる問題であるかが鍵である。しかし、学級活動は、日常生活や学級生活に関わる問題であるのに対して、道徳科は、道徳的な問題であることが望ましい。

次に具体的な例を挙げながら考えることとする。

中学年資料に「大きな絵はがき」^[6]、指導内容は「(9) 友達と互いに理解し、信頼し、助け合うこと」がある。料金不足の定形外郵便をもらった主人公が返信に料金不足を書くか迷う話である。ここでの問題は、「せっかくだ

表3 問題解決的な学習

ねらい	問題解決的な学習を通して、道徳的な問題を多面的・多角的に考え、児童生徒一人一人が生きていく上で出会う様々な問題や課題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養う。
導入	<p>問題の発見や道徳的価値の想起など</p> <ul style="list-style-type: none"> 教材や日常生活から道徳的な問題を見つめる。 自分たちのこれまでの道徳的価値の捉え方を想起し、道徳的価値の本当の意味や意義への問いを持つ(原理・根拠・適用への問い)
展開	<p>問題の探究(道徳的な問題状況の分析・解決策の構想など)</p> <ul style="list-style-type: none"> 道徳的な問題について、グループなどで話し合い、なぜ問題となっているのか、問題をよりよく解決するためにはどのような行動をとればよいのかなどについて多面的・多角的に考え議論を深める。 道徳的な問題場面に対する解決策を構想し、多面的・多角的に検討する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>【教師の主な発問例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ここでは、何が問題になっていますか。 何と何で迷っていますか。 なぜ、■■(道徳的諸価値)は大切なのでしょう。 どうすれば■■(道徳的諸価値)が実現できるのでしょうか。 同じ場面に出会ったら自分ならどう行動するでしょう。 なぜ、自分はそのように行動するのでしょうか。 よりよい解決方法にはどのようなものが考えられるでしょう。 </div> <p>探究のまとめ (解決策の選択や決定・諸価値の理解の深化・課題発見)</p> <ul style="list-style-type: none"> 問題を解決する上で大切にしたい道徳的価値について、なぜそれを大切にしたいのかなどについて話し合い等を通じて考えを深める。 問題場面に対する自分なりの解決策を選択・決定する中で、実現したい道徳的価値の意義や意味への理解を深める。 考えた解決策を身近な問題に適用し、自分の考えを再考する。 問題の探究を振り返って、新たな問いや自分の課題を導き出す。
終末	<p>まとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> 教師による説話。 本時を振り返り、本時で学習したことを今度どのように生かすことができるかを考える。 道徳的諸価値に関する根本的な問いに対し、自分なりの考えをまとめる。 感想を聞き合ったり、ワークシートへ記入したりして、学習で気付いたこと、学んだことを振り返る。

道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議資料引用

れいな絵はがきを送ってしてくれたのに友達に料金不足と書けるか」である。「どうすればよいのか?」となると子ども達は二者択一で無く、様々な方法を考えるであろう。その方法に共通することを話し合い「友達を裏切らない。友達の思いを大切にする」の道徳的価値を導き出す。その上で、道徳的価値レベルが有り、友達への思いや信頼が強いほど忠告の部分が入ることを確認したいものであ

[6] 東京書籍「大きな絵はがき」『小学校道徳 ゆたかな心で 4年』115-117。転校した友達から綺麗な絵はがきが広子に送られてきた。しかし、定形外で料金不足であった。兄は料金不足のことを返事に書くように言うが、母は書かなくても良いという。広子は迷うが、結果書くことに決めるという話である。

る。この資料を活用しての問題解決学習は、価値理解を前提とし、人間理解や他者理解が障壁となって葛藤し、より良い生きた方を導き出すこととなる。そこでこの指導をより良いものにするには、葛藤する理由、つまり主人公が置かれている立場の状況把握が子ども達にできている、話し合い時の条件、時間や場所、相手、方法が明確なことが大切である。その他、資料の中に価値葛藤がある資料として、高学年資料に「星野君の二塁打」^[7]と「手品師」^[8]もある。指導内容は「(12) 法やきまりの意義を理解した上で進んでそれらを守り、自他の権利を大切に、義務を果たす」と「(2) 誠実に、明るく心で生活すること」である。いずれも立場を明確にして話し合いが活発化する資料として有名であるが、話し合い後の整理や収集が付かず、最後は望ましい価値の押し付けが見られる場合が多い。話し合い後の「探究のまとめ」に工夫が必要と言える。

さらに日常生活からの問題解決的な学習について、例を挙げながら考えてみる。

文部科学省発行の「わたしたちの道徳小学校一・二年」に「しては ならない ことが あるよ」^[9]、指導内容は「(1) よいことと悪いことの区別をし、よいと思うことを進んで行うこと」である。「うそを ついてはいけません」という言葉と共に挿絵がある。同様の例示が6つある。例示を1つずつ取り上げながら、低学年なりに理由付けを話し合うことができる。それぞれの理由に共通するものとして「みんな楽しい学校生活にしたい。そのために人が嫌がることはしない。よいことを進んでする」となる。同様のものが「わたしたちの道徳小学校三・四年」には「働くことの大切さ」^[10]、指導内容は「(13) 働くことの大切さを知り、進んで皆のために働くこと」がある。「わたしたちの道徳小学校五・六年」には「考えよう、これからの社会と私たち ぐるとりてを周りを見わたせば より良くしたいこの社会」^[11]、指導内容は「(12) 法やきまりの意義を理解した上で進んでそれらを守り、自他の権利を大切に、義務を果たす」がある。いずれも日常生活での体験や他教科での学びを活かした話し合い

表4 道徳的行為に関する体験的な学習

ねらい	役割演技などの疑似体験的な表現活動を通して、道徳的価値の理解を深め、様々な課題や問題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養う。
導入	道徳的価値を実現する行為に関する問題場面の提示など ・教材の中に含まれる道徳的諸価値に関わる葛藤場面を把握する。 ・日常生活で、大切さが分かっているにもかかわらず実践できない道徳的行為を想起し、問題意識を持つ。
展開	道徳的な問題場面の把握や考察など ・道徳的行為を実践するには勇気がいることなど、道徳的価値を実践に移すためにどんな心構えや態度が必要かを考える。 ・価値が実現できない状況が含まれた教材で、何が問題になっているかを考える。 問題場面の役割演技や道徳的行為に関する体験的な活動の実施など ・ペアやグループをつくり、実際の問題場面を役割演技で再現し、登場人物の葛藤などを理解する。 ・実際に問題場面を設定し、道徳的行為を体験し、その行為をすることの難しさなどを理解する。 道徳的価値の意味の考察など ・役割演技や道徳的行為を体験したり、それらの様子を見たりしたことをもとに、多面的・多角的な視点から問題場面や取り得る行動について考え、道徳的価値の意味や実現するために大切なことを考える。 ・同様の新たな場面を提示して、取りうる行動を再現し、道徳的価値や実現するために大切なことを体感することを通して実生活における問題の解決に見通しをもたせる。
終末	まとめ ・教師による説話。 ・本時を振り返り、本時で学習したことを今度どのように生かすことができるかを考える。 ・道徳的諸価値に関する根本的な問いに対し、自分なりの考えをまとめる。 ・感想を聞き合ったり、ワークシートへ記入したりして、学習で気付いたこと、学んだことを振り返る。

道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議資料引用

の中で、子ども達の発達段階なりの解決方法と自分との関わりでの課題が見出せる。

この問題解決的な指導のポイントは、話し合いが中心であるために「考えを作る」「考えを出し合う」「考えを練り合う」ことができる事前準備や書く活動の設定、座席配置、学習形態等の工夫が必要である。特に話し合い

[7] 東京書籍「星野君の二塁打」『小学校道徳 希望を持って 5年』83-87. 同点で最終回の攻撃。最初のバッターがヒットで一塁に出た。監督の別府さんは次のバッターの星野にバントを命じた。サイン通りにしようとしたが、どうしても打ちたくなかった。結果、二塁打で、大きな大会出場がきまり、星野は英雄となった。しかし、試合後、監督の別府さんから「チームの規則を乱した」と話があり、星野はうつむいたままであったという話である。

[8] 学研「手品師」『みんなのどうとく 5年』66-69. 腕は良いが売れない手品師が暇だからと言って、しょんぼりした男の子を手品で励まし、明日も来ると約束をする。しかし、その夜、友達の電話で手品師が急病で、代わりに直ぐ来るように連絡がある。大きなチャンスで迷うが、きっぱりと断ってしまうという話である。

[9] 文部科学省「してはならないことがあるよ」『私たちの道徳小学校一・二年』42-43. 絵と言葉でしてはいけないことを表している。「うそをついてはいけません」「ともだちをたたいてはいけません」「人のものをとってはいけません」「いじわるをしてはいけません」「悪口を言っていないけません」「人のものをかくしてはいけません」。

[10] 文部科学省「働くことの大切さ」『私たちの道徳小学校三・四年』130-131. 写真と吹き出しからなっている。吹き出しにやり甲斐のコメントが書かれている。看護師、消防士、教師、工場働く人、農家の人を掲載している。

[11] 文部科学省「考えよう、これからの社会と私たち」『私たちの道徳小学校五・六年』120-121. 地域社会の公衆道徳が守られていない写真を7枚掲載している。歩道への駐輪、車内での携帯、車両内へのゴミの放置、落書き、ゴミの不法投棄、携帯しながらの運転、分別の看板。

が親和的にできる日常の学級経営こそ基盤となる。なお、学習のまとめ後は、道徳的实践に繋ぐこととなり、例えば「がんばり表」での日常的な取り組みにも発展するであろう。その時には、自分との関わりで目標設定を自己決定し、自己評価と繋げていくようにしたい。

(3) 道徳的行為に関する体験的な学習

この学習指導法は、「役割演技などの体験的な学習を通して、実際の問題場面を実感を伴って理解することを通して、様々な問題や課題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養うことができる。問題場面を実際に体験してみること、また、それに対して自分ならどういう行動をとるかという問題解決のための役割演技を通して、道徳的価値を実現するための資質・能力を養うことができる」とある。具体的な展開例は表4の通りである。

導入では、教材に含まれる葛藤場面や日常生活で正しいと分かっているても実行できない行為の提示から学習課題を作る。展開前段では、まず、問題場面で望ましい行為を妨げることについて話し合い、要因を明らかにする。次にその要因を役割演技等で場面再現し、阻害要因の体験的理解を図る。そして、道徳的行為に繋ぐ・高めるための方法を話し合い、確認したり再度演技したりして解決への見通しを持たせる。終末では、他の学習指導法と同様、自分なりの振り返りと新たな気づき、今後の生き方を書き留める。

この指導法は、望ましい行為と分かっているても(価値理解)、恐怖心や羞恥心、自己満足や自己防衛等が優先してしまう(人間理解)、人間としての弱さの克服を目指した指導法である。今回、いじめ問題への対応や規範意識の向上が期待されており、この事に資する指導法だと考える。

では具体例を挙げて考えることとする。

「わたしたちの道徳小学校五・六年」に「なぜ、かたよった見方や接し方をしてしまうのだろうか」^[12]、指導内容は「(13) 誰に対しても差別することや偏見を持つことなく、公正、公平な態度で接し、正義の実現に努めること」がある。掃除時間の場面で無理矢理ゴミ捨てに行かされる話である。登場人物三人の関係と傍観者等、状況設定をして、何が問題なのか話し合って課題を明確にする。その後、役割演技で場面を再現し、人間的な弱さの体験をする。そして、問題場面で取りうる行動について話し合い、実現するために大切なことをそれぞれの立場で整理するようにする。終末では、今後の生活に活かすことを自分なりの考えでまとめるようにする。題材がいじめの発端、若しくは行

われている可能性を感じる内容なので、学級の実態や授業展開によっては助長し、逆効果になるかもしれない。教師と児童、児童相互の人間関係ができており、支持的風土の学級でなければ役割演技や解決に至る前向きな話し合いはできない。本指導法に限ったことでは無いが、温かな学級で、落ち着いた雰囲気の中で道徳科の学習が行われるように、日常の学級経営こそ大切にしていける必要がある。そのような学級であれば、本方法や主題を積極的に取り上げることで、一人一人の子どもの道徳性を高め、更により良い学級作りに繋げることができる。

次に道徳的諸価値に関わる葛藤場面の資料で具体的展開を考えることとする。4年生の資料に「心の信号機」^[13]がある。指導内容は、「(6) 相手のことを思いやり、進んで親切にすること」である。目の不自由な男性が横断歩道で立ち止まっている。主人公は様子を伺いながら声を掛けるか迷う話である。導入で資料の問題場面を提示して、声を掛けられない主人公に焦点を当て、本時学習への方向付けをする。展開では、まず声を掛けられない理由について話し合う。理由を活かしながら役割演技で再現し、解決方法について話し合う。目の不自由な方への思いを推測する、想像する意見が出る。この思いの深さが親切な行為へと自身を導くことになると確認する。終末では、本時の学びや振り返りをさせ、今後の自身の生き方を整理させる。本資料及びこの方法で扱う資料は、望ましい行為の在り方、「価値理解」を確認した後、人間はなかなかその通りの行為をすることは難しいという「人間理解」での葛藤が中心となる。葛藤を乗り越え、行為へ導くためには「勇気」となるであろう。しかし、その勇気まで高めたものが、「自己」の誠実な心や快の感情の経験想起である。また、「対他」や「対社会」、「対自然」への思いが膨らむと行為へと繋がる。このようなことから指導内容は、全てが「勇気」とはならず、「正直、誠実」や「節度、節制」、「親切、思いやり」、「友情、信頼」、「規則の尊重」と関わらせて立案し、展開することが期待される。

(4) 3つの事例のまとめと課題

質の高い多様な指導法を概観してみたが、改めて道徳科の目標や特質、基本的な事項等を確認しなければ、提案された方法だけが一人歩きをする。

まず、道徳教育も道徳科も「道徳性」を養うことが目標である。道徳性とは、人間としてよりよく生きようとする人格的特性である。これは、児童が道徳的価値を自覚し、

[12] 文部科学省「なぜ、かたよった見方や接し方をしてしまうのだろうか」『私たちの道徳小学校五・六年』134。「そうじの時間です。ごみ箱にたまったごみを、最後に収集場所に捨てに行くことになりました。当番だったAさんがごみ箱を持って行こうとすると、Bさんが『Aは行かなくていいよ。』と言いました。そして、Cさんに向かって、『C、お前が行けよ。』と言って、Cさんにごみ箱をおし付けました。」という話である。

[13] 学研「心の信号機」『みんなのどうとく 4年』18-20。おつかいを頼まれたばくは、信号機のあるところで目の不自由そうな人と出会う。様子をうかがいながら横断歩道を渡ってから引き返そうと思うのだが勇気が湧いてこない悩む話である。

自己の生き方についての考えを深め、日常生活や今後出会うであろう様々な場面、状況において、道徳的価値を実現するための適切な行為を主体的に選択し、実践することができるような内面的資質であり、道徳的判断力、道徳的心情、道徳的实践意欲と態度の諸様相からなる。そのために、一朝一夕には育たない。徐々に、しかも着実に養われることによって、潜在的、持続的な作用を行為や人格に及ぼし、長期的展望と綿密な計画に基づいた丹念な指導が必要とされている。そこで道徳科を「要」として、学校の教育活動全体で行う道徳教育との関連を図り、「補う、深める、捉え直し発展させる」で計画的、発展的な指導を通して行うのである。これらのことから、目標や特質に照らし、「一時間で指導する」と力まず、児童の道徳的価値の自覚を促す指導法の工夫を行いながら、児童と共に教師も人間としての生き方を共に考え、語り合い、行為に繋ぐように努める姿勢が必要である。

次に、提案されている指導法は、「物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方を考える学習」で話し合いが重視される。また、各指導法の効果的な手立てとして役割演技や動作化等の体験的な表現活動も例示としてある。これらの方法は、基盤に何でも言える学級風土が必要である。共感的人間関係に支えられ、一人一人の自己存在感が保障されている必要があり、日常的な学級経営こそ大切にされなければならない。

そして、教材である。教科書の検定結果で具体的な実践は大きく変わる。現時点では、文部科学省から出版されている「私たちの道徳」と似た編集となるであろう。目標に「道徳的価値についての理解を基に」や「多面的・多角的に考え」があることから、価値理解に繋がる説明を読んだり、書き込みをして考えたりが指導や事前指導で利用されるであろう。また、今まで通り読み物資料が中心ではあるが「価値葛藤」や「問題場面」のある資料が増加する。しかも、伝記等、多様な資料が教材として組み込まれる可能性があり、十分な資料分析が欠かせない。なお、道徳的な問題には、「①道徳的諸価値が実現されていないことに起因する問題、②道徳的諸価値について理解が不十分又は誤解していることから生じる問題、③道徳的諸価値のことは理解しているが、それを実現しようとする自分とそうでない自分との葛藤から生じる問題、④複数の道徳的価値の間の対立から生じる問題などがある」としており、資料分析、授業構想時に参考としたい。

最後に、今までの指導方法が全て悪かったとは言えない。解説書にも以下のような文言がある。「登場人物の立場に立って自分との関わりで道徳的価値について理解したり、そのことを基にして自己を見つめたりすることが求められる。また、教材に対する感動を大事にする展開にしたり、道徳的価値を実現する上での迷いや葛藤を大切にしたり、

展開、知見や気づきを得ることを重視した展開、批判的な見方を含めた展開にしたりするなどの学習指導過程や指導方法の工夫が求められる。その際、教材から読み取れる価値観を一方的に教え込んだり、登場人物の心情理解に偏ったりした授業展開とならないようにするとともに、児童が道徳的価値を自分との関わりで考えることができるように問題解決的な学習を積極的に導入することが求められる」。

以上、3つの事例はあくまでも現状を打破し、より良いものを求めている提案である。したがってこれらの例を下に、学習指導要領の改訂の趣旨をしっかりと把握した上で、各々の学校の実態、児童の実態を踏まえ、授業の主題やねらいに応じた適切な指導方法・教材を選択し、創造することで、真の質の高い指導法にすることができる。

3. 評価の在り方

(1) 評価の現状と課題

各教科等の評価は、子どもの成長と意欲につながる。また、教師の指導改善や充実に活きるものである。道徳科も学習指導要領にあるように「児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする」である。しかし、今までの取り組みはどうであっただろうか。道徳の時間そのものに対して忌避する風潮や価値観の押し付け、資料の読み取り、生活経験の話し合い等、量的・質的課題があり評価が不十分だったと考えられる。また、道徳性の育成には時間が掛かることも、積極的な評価に繋がらなかったと考えられる。また、通信簿や指導要録に「行動の記録」や「所見」が存在はしたものの、「十分に満足できる状況にあると判断される場合に、○印を記入」等、道徳教育に関わる記録等が不十分でも作成することができたからである。

(2) 今後の方向性

今回、教科化にあたり以下のことが確認されている。

○数値による評価ではなく、記述式であること。

○他の児童との比較による相対評価ではなく、児童生徒がいかに成長したかを積極的に受け止め、励ます個人内評価として行うこと。

○他の児童生徒と比較して優劣を決めるような評価はなじまないことに留意する必要があること。

○個々の内容項目ごとではなく、大きくくりなまとまりを踏まえた評価を行うこと。

○発達障害等の児童についての配慮すべき観点等を学校や教員間で共有すること。

○現在の指導要録の書式における「総合的な学習の時間の記録」、「特別活動の記録」、「行動の記録」及び「総合所見及び指導上参考となる諸事項」などの既存の

欄も含めて、その在り方を総合的に見直すこと。

これらを受けて、報告では資料1・2が「様式2（指導に関する記録）」の参考として挙げられている。あくまでも参考ではあるが、今までの流れからこの様式が現場で使われることが予想され、このための準備が進められることとなる。

（3）評価のための準備と構え

道徳科の評価として「学習状況及び道徳性に係る成長の様子」欄が設けられたことで、表5にあるように専門家会議の意見もあるが、「指導改善」「個の成長の記録」、「通信簿の形式変更」が図られると考える。

まず、指導改善であるが、「学習状況」の項目設定により、主題選定の理由やねらいが明確となり、そのための手立てと期待される子どもの反応や学びを意識しての実践となる。年間指導計画の展開の概要を参考に指導するものの、指導反省が次週や次回に繋がり、指導技術の向上に子どもの学びも深まっていくと考えられる。

次に、学習状況の記録と成長の様子を残していく必要が生じたため、学習ノートやプリントが工夫されることとなる。ノートを一冊用意して、道徳ノートや学習プリントを貼るなどしたらどうであろう。いずれにしても学びの足跡は、教師も子どもも自然と振り返りを促し、十分さや不十分さを自己認識することとなり、子どもにとっては道徳的価値の主体的自覚から道徳的実践への移行を促すことにも繋がる。同じ指導内容の場合は、ノートで振り返り、発展や深化を意図した指導も容易となる。記録の残し方の工夫が毎週の道徳科の時間を楽しく、意義深いものに変え、充実

した35週に繋がると考える。

最後に、通信簿の形式の変更についてである。通信簿は、学期毎の各教科の記録や総合的な学習・特別活動等の活動記録、行動の記録、担任の所見等で構成されている。学期毎に保護者宛て、学校での子どもの様子の連絡の意味合いがあるが、学級担任にすれば、指導要録作成のための補助簿的な役割も果たしている。通信簿の記録をまとめ、要約して指導要録に転記する場合は殆どである。また、現場の実情として通信簿のデジタル化が進み、リンクしての要録の作成も進んでいるようである。このように考えると、通信簿の形式の変更は、最低でも学期毎に「学習状況及び道徳性に係る成長の様子」を書くこととなる。結果として先に挙げた「指導改善」「個の成長の記録」に大きく影響し、充実をもたらすことになる。さらに通信簿を作成するに当たり通信簿の補助簿（通信簿作成のための成績一覧表）や文書下書き表（所見やコメント）を作成し、校長等の指導・確認の上、転記し、配布していることからすると、指導改善・充実への意識が高まることが予想される。なお、この時に重要なこととして、実践を繰り返しながら、子ども一人一人の成長を確認しながら、よりよい指導法を求めて年間指導計画の展開の概要に赤を入れて修正し、我が校の全体計画や年間指導計画を作り上げていくことが期待される。校長のリーダーシップと共に道徳教育推進教師の役割が期待されるところである。

おわりに

2016年8月26日、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会において「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」が取りまとめられWEBで公表された。同時に9月9日から10月7日までの間、パブリック・コメントが行われている。「“よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る”という目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子どもたちに育む『社会に開かれた教育課程』を実現。学習指導要領等が、子どもたちと教職員のみならず、家庭・地域、民間企業等も含めた関係者が幅広く共有し活用することによって、学校や関係者の創意工夫のもと、子どもたちの多様で質の高い学びを引き出すことができるよう、学校教育を通じて子どもたちが身に付けるべき資質・能力や学ぶべき内容などの全体像を分かりやすく見渡せる『学びの地図』としての役割を果たせるようにすることを目指す」とある。道徳教育も「（15）道徳教育」として記述がある。どのような反響があるか注目したいところである。また、「小学校道徳教科書検定8社が申請」（毎日新聞オンライン2016年6月1日）とある。検定結果が出れば、採択に向けて現場は騒がしくなるとともに、いよいよ具体化するであろう。

表5 評価に関する専門家会議の意見

- ・ 児童生徒の学習の過程や成果などの記録を計画的にファイル等を集積して学習状況を把握すること。
- ・ 記録したファイル等を活用して、児童生徒や保護者等に対し、その成長の過程や到達点、今後の課題等を記して伝えること。
- ・ 授業時間に発話される記録や記述などを、児童生徒が道徳性を発達させていく過程での児童生徒自身のエピソード（挿話）として集積し、評価に活用すること。
- ・ 作文やレポート、スピーチやプレゼンテーション、協働での問題解決といった実演の過程を通じて学習状況や成長の様子を把握すること。
- ・ 1回1回の授業の中で全ての児童生徒について評価を意識してよい変容を見取ろうとすることは困難であるため、年間35単位時間の授業という長い期間の中でそれぞれの児童生徒の変容を見取することを心掛けるようにすること。
- ・ 児童生徒が1年間書きためた感想文等を見ることを通して、考えの深まりや他人の意見を取り込むことなどにより、内面が変わってきていることを見取ること。
- ・ 教員同士で互いに授業を交換して見合うなど、チームとして取り組むことにより、児童生徒の理解が深まり、変容を確実に確かむことができるようになること。
- ・ 評価の質を高めるために、評価の視点や方法、評価のために集める資料などについてあらかじめ学年内、学校内で共通認識をもっておくこと。

道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議資料引用

さらに学習指導要領が大幅に見直される中、道徳教育の方針である「全体計画」や「年間指導計画」も、大まかな基本的方針は固まったとしても、各教科との関連、具体的指導内容が決まらない限り進むことはないだろう。具体化し、大きく前進するのは、道徳科の教科書のみならず、各教科の教科書の採択が進んでからになる。そう考えると計画立案で山場を迎えるのは、2017年8月頃であらう。これまた楽しみである。

